

自分たちの音楽をつくり出す音楽学習の開発(3)

—音楽科の「協同的創造力」の育成をめざして—

黒瀬 基郎 濱本 恵康 榎藤 敦子 桑田 一也
青原 栄子 大橋美代子

1. 社会情勢と教育の現状

21世紀初頭の我が国は、国際化・高度情報化・科学技術の躍進・環境問題・少子高齢化などの急激な社会変動の中にある。

そのような中、音楽教育の先進国である欧米諸国や我が国とも文化的関係の深いアジア近隣諸国において、カリキュラムの計画的な改革が教育施策の重要な柱となっている。OECD（経済協力開発機構）やUNESCO（国連教育科学文化機関）が中心となって、カリキュラムの開発・実施・評価について国際協力を促進しているところである。

日本でも、筒石賢昭氏が、これからの教育課程の作成にあたり、音楽教育の目的、意義、系統性、可能性について見直し、音楽の特性から、学習を「学びの共同体」に変えていく必要があると提言している。

こうした社会的要請に応え、教育の動向に学ぼうとするとき、私たちは21世紀型の学力に注目し、新しい学校カリキュラムの開発をめざさなくてはならない。

2. 21世紀に求められる学力

昨年度までの研究では、21世紀型の「教科学力」を、「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな教科学力」と捉え、教科の学習で学んだことを自分たちの生活の改善や社会づくりに生かしていくことができる力を大切にしたい。

音楽科でも、従来の4観点に新たな観点「協同的創造力」を加え、「自分たちの感じる音楽をイメージ豊かに膨らませながら、協同的な学びを通して、積極的に創り出したり表現したりする力」の育成に取り組んできた。

その結果、次のような成果と課題が明らかとなった。

- 「協同的創造力」を育てる小中連携カリキュラム開発が必修教科「音楽」で進めることができ

た。

- 異学年・異校種交流という協同的な学びによる小中合同授業と小中教員によるTTの授業が展開でき、この学習方法は、表現を高める授業に大変効果的であることが分かった。

- △ 異学年・異校種交流で授業を進めた場合、下級生は上級生に教えてもらうことにより知識や技術が向上したと捉えたが、上級生は知識や技術を正確に伝えられないもどかしさを感じていた。

そこで、これまで必修教科で行ってきた研究であったが、それだけにとどまらず、学習内容・方法をより深化・発展させることが可能である選択教科の時間を「協同的創造」の時間とし、小中で連携を図りながら協同的創造学習の研究をしていこうと考えた。

3. 協同的創造学習の特徴

選択教科「協同的創造」で展開される協同的創造学習には、次のような特徴がある。

(1) 必修教科の発展型

中学校では、第7次学習指導要領に基づき、子どもたちが必修教科の発展的な内容に興味・関心を持ち、自分で教科を選択し決定していくという選択教科を、既に実施している。選択教科は、少人数なので自分の得意なことが生かされるといった子どもの特性に基づいた学習展開が可能である。また、その教科を選択してきている子どもたちが集まっているので集団の質は均一に近い。従って、基礎・基本といった内容よりも、より深化・発展した内容の授業が展開できる。

そこで、小学校でもそのメリットを生かしていくことはできないかと考え、小学校5・6年生合同の選択教科を年間15時間、新設することになった。

(2) 新たな文化創造の学習

子どもたちは、課題追求に向けて、多様な考え方や

価値観を持って取り組み、学びの過程（プロセス）やその学習を経て「文化」を獲得していく。「文化」とは、新たな価値を見だし、自分にとっても他者にとっても社会にとっても、意味のあるものを創り出していこうとするものだからこそ、創造的な学びなのである。

(3) プロジェクト型の学習

新たな文化創造の学習を展開していこうとすると、次のような学習過程を踏む必要がある。これは、課題追求型・問題解決型の学習でもあり、他者とのコミュニケーションを大事にした協同的な学びでもある。

表1 協同的創造学習の学習過程

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 課題意識を持つ ② 創造的な学び ③ 学習を振り返る ④ 発信する ⑤ 自己実現に向けて拓く |
|--|

(4) 集団による協同的な学びの構築

中学校は学年単位の集団で、小学校は5・6年生合同の集団で進めていく。このような集団の中で子どもたちが協同で学習していくことは、自分とは異なる考えに触れ、新たな知識や技能、高い価値を獲得して、一人ひとりの思考や表現を深めることができると考える。

4. 選択教科「音楽科」でめざす子ども像

音楽科では、以上のような学習を展開していく中で、子どもたちが自分たちの感じる音楽をイメージ豊かに膨らませながら、協同的な学びを通して積極的に創り出したり表現したりして、「自分たちの力で、自分たちの音楽を創り上げてことができるようになって欲しい」と願い、次のようなめざす子ども像を設置した。

音楽に主体的にかかわり、授業を通して身につけたことを様々な音楽活動において発揮し、そこに新たな音楽文化を創造することができる子ども

5. 選択教科「音楽科」で求める協同的創造力

以上のようなめざす子ども像から、音楽科で求める協同的創造力を「自分たちの音楽をつくり出す力」とした。

6. 協同的創造力を支える能力

これまでの研究の中で、音楽科の協同的創造力を支える資質に、「感じる力」「イメージする力」「コミュニケーション力」「創造力」「表現力」の5つの力を考え

てきた。それぞれの関係性は、図1の通りである。

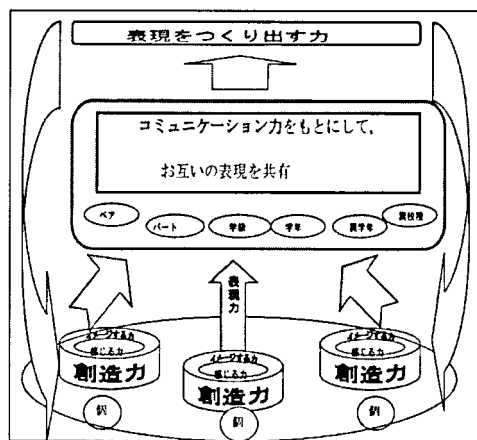


図1 音楽科の「協同的創造力」のイメージ図

図のように、個が五感を通して音や音楽を感じ取ろうとすると自己の内面にイメージが形成されていく。自分なりの思いが膨らんでくれば感じたことを「表出したい」とか「創り出したい」という思いが出てくる。より豊かな音楽表現とするためには、様々な形態でもって自他の価値観をすり合わせていく。お互いの表現を共有していく。このような力がお互いに支え合いながら自分たちの表現をつくり出そうとする。

この力こそ、音楽科のめざす協同的創造力なのである。

7. 音楽科における協同的創造学習

音楽科の協同的創造学習の過程は、「集団で表現をつくり出す」過程において、個々が抱えている既存の音楽的価値観を集団の中で練り上げ、新たな音楽をつくり出す過程をいう。

かかわることで新たな発見をしたり、思いを共感、共有したりしながらお互いの表現の幅を広げていく

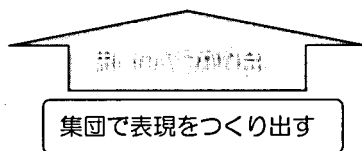


図2 音楽科の「協同的創造学習」の一過程

8. 取り組みの実際

(1) 小学校の取り組み

①特に注目した音楽的なコミュニケーション力

協同的創造力を支える5つの力の中でも、コミュニケーションの積極的なかわりのある授業を展開しようとする、コミュニケーション的観点を発展させて考えるべきである。そこで、小学校音楽科では、協同的創造力を支える力のうち、コミュニケーション力に注目した。

川池聡氏は、「豊かな表現力は、豊かな思考と判断の能力に支えられて成り立つものである。」と述べている。これを、学級や教科経営に反映させて考えれば、「クラスの中である子どもが表現したときに、それをきちっと受け止める、その上でそれに対して意見が違えばはっきり言うという態度を育てていくこと」が大切だということではなからうか。つまり、表現力は、一人ひとりの能力の育成と同時に、授業の中でお互いにコミュニケーションができる資質の育成も含んで考えていくことが必要であろう。

このように考えると、音楽的なコミュニケーション力は能力と資質の両面から規定すべきである。

そこで、能力面については、音楽的内容について理解し、その多様な表現を聴き取ったり歌唱・器楽・創作したりすることができること、資質面については、音楽的内容について意見を述べ意見の違いを理解しながら、自分たちの考えをつくっていくことができるという両面から、表2のように第5・6学年の音楽的なコミュニケーション能力を規定した。

この両者が、教材を通した音・音楽と指導者と仲間の積極的なかわりによって相乗効果を発揮しながら、図3のように関わっている。

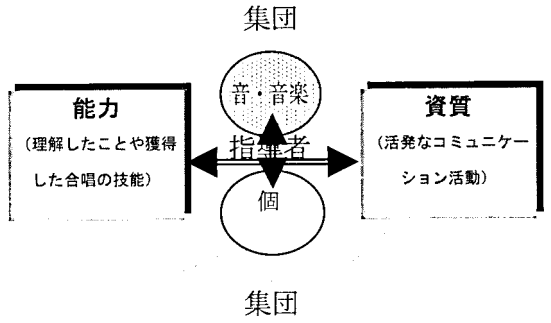


図3 音楽的なコミュニケーション力

②小学校音楽科の研究仮説

選択教科の授業の中で、合唱の技術力とそれを異学年の相手に伝えようとする資質の両面を育てていけば、音楽的なコミュニケーション力が育ち、自分たちで音楽文化を創造する力(協同的創造力)を育成することができるであろう。

③指導の実際

題材「コンクールに出られる?! くらいの歌声を創ろう」(全15時間)

1) 協同的創造力の目標

声の響き合う美しさを求めて、仲間と協力しながら、進んで歌唱表現を追求することができる。

2) 題材計画

- 第1次 ガイダンス …… 1時間
- 第2次 テーマを決めよう! …… 1時間
- 第3次 富澤作品を知り、歌唱表現の工夫をしよう!
…………… 9時間
- 第4次 学習の成果を披露しよう! …… 3時間
(響け! 音楽選択者の声コンサート …… 課外)
- 第5次 振り返りをしよう …… 1時間

3) 題材の協同的創造力の評価規準

声の響き合う美しさを求めて、仲間と協力しながら、進んで歌唱表現を追求している。

4) 協同的創造力の第3次の評価計画

表2 第5・6学年の音楽的なコミュニケーション力の目標

第5・6学年	
能力	○楽曲構成の豊かさや美しさを感じ取り、曲に対する自分たちの解釈やイメージを、音を通して適切に表現していくため、発声、読譜力などの表現の技能を伸ばし、創造的に表現する技能を高めることができる。
資質	○自分の考えと比較しながら、仲間の考えを聞くことができる。 ○自分の考えを、表現要素に結びつけて説明したり意見を述べたりすることができる。 ○友達の実践に対して、考えやその根拠を問いたいという思いを持つことができる。 ○友達の実践や表現を自分のものにし、その考えや表現を明確にし、そのために議論することへの価値を意識することができる。

時	学習内容 (時数)	評 価	
		協同的創造力の 評価規準	評価方法
⑨	「この星に生まれて」の歌詞を理解し、情景を想像しながら主旋律を歌い、表現の工夫をする。(1)	感じ取った曲想を説明し合い、仲間とともに表現の工夫をしている。	行動観察 学習の振り返り 自己評価
⑩	「この星に生まれて」の音程をきれいにそろえて、ソプラノとアルトの旋律を歌う。(1)	歌詞の発音や音程に気をつけ、お互いのパートの音を聴き合いながら、正しいリズムや音程に心がけて合唱をしている。	行動観察 学習の振り返り 自己評価
⑪	「この星に生まれて」のユニゾンを意識し曲想の変化に注意しながら、二部合唱をする。(1)	主旋律を感じ取りながら、声の出し方や強弱の表現を工夫し、表情豊かに合唱をしている。	行動観察 学習の振り返り 自己評価

で歌う曲 BEST10」にも上位にランクインするほど、教材性の高い楽曲が多い。選択教科の授業でこれまで歌った楽曲は、「Believe」(2部合唱)、「君をのせて」(2部合唱)、「鳥唄」(斉唱)、「この星に生まれて」(2部合唱)である。

これらの楽曲を取り扱いながら、プロジェクト型の学習過程を踏んだ。一連の学習過程は、図4の通りである。主に6年生の部長や副部長の子どもたちが進行し、腹筋運動や発声練習をした後、本時の学習課題の設定や学習活動といった協同的創造学習へと入り、最後に学習を振り返るという過程である。この振り返りによって、学習の中で身に付いた力を確認し、次時の課題を明らかにするとともに、合唱に対する個の考えや価値観を醸成していった。



5) 活動の様子

第1次1時では、5・6年生合同で全選択教科のガイダンスを行い、8つの各教科担当者がどんな学習を構想しているか説明をした。音楽科のガイダンスでは、作曲家の富澤裕先生の作品を通して合唱を創り上げていくことを知らせていった。その話を受けて教科希望を尋ねたところ、音楽科には5年生が7名と6年生が11名の計18名(男子4名、女子14名)が集まった。ここに集まった子どもたちは、「音楽が好き」「合唱が好き」という強い意志で選択教科を選んできている。

表3 音楽科を選択した理由

第1次1時を終えて

私は、みんなの声が合わさる合唱が好きです。だから、音楽を選びました。富澤先生に会えるのも楽しみ!

第3次では、富澤先生の作品を通して、合唱の豊かな表現を工夫していった。富澤先生の作品は、月刊誌の「子どもたちが好きな歌20」にも、「子どもたちが喜ん



〈課題をつかむ〉

- ・ 発声練習を兼ねたウォーミングアップによる歌唱活動
- ・ 模範合唱や自分たちの合唱との聴き比べによる鑑賞活動



〈協同的創造学習の場〉

- ・ ペアやパート、グループなどの学習形態の工夫により、意見交換の活性化
- ・ ピアノで音を取りながらの練習やア・カペラでの練習を繰り返す



〈振り返り〉

- ・ まとめの合唱やその合唱の聴き直し
- ・ 学習の振り返りや自己評価カードの記入で自分たちの歌い方・考えを醸成

図4 一連のプロジェクト型の学習過程

この学習の繰り返しによって、子どもたちは次のように変容していった。

表4～6は、学習の振り返りである。これらに見られるように、授業を繰り返す中で音程やリズム、音色など、子どもたちが豊かな歌唱表現を追求しているこ

とが伺える。表7では、技術を習得し協同で表現をつくり出す楽しさも感じてきていることが分かる。

表4 「この星に生まれて」の初回

第3次6時を終えて

「この星に生まれて」を初めて歌って、音程が少しずれたけど、リズムや音色はそろっていました。

表5 「この星に生まれて」の2回目

第3次7時を終えて

練習量が足りないせいか、気持ちを込めて歌えなかったので、強弱をはっきりつけて歌えるようにしたい。

表6 「この星に生まれて」の2回目

第3次8時を終えて

もっと声を大きくして歌えば、もっと良くなると思う。気持ちを込めて歌いたい。

表7 「この星に生まれて」の2回目

第3次8時を終えて

だいぶ低音の音がとれるようになった。高音と低音が合っていい音になった。強弱もついて楽しかった。

も自己評価の平均値が上昇している。しかし、第3次の7時までは、5年生の平均値が6年生のそれを上回っていたが、第3次の8時から自分たちが強弱などをつけたいところを全員で意見交流しながら拡大楽譜にその思いを記入した活動により、6年生の資質の平均値が5年生を上回り始めた。6年生は、それまで教える難しさを感じていたが、お互いの思いを十分伝えることによって分かり合えたので、関係が構築されたと思われる。

6年生へ反応を返す力
5年生を受け入れる力

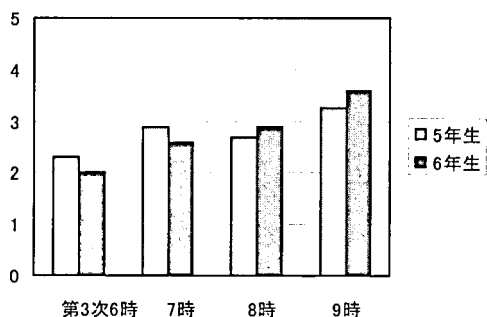


図6 音楽的なコミュニケーション力の資質面についての自己評価の変容

それから、音楽的なコミュニケーション力の能力面については、図5から5年生も6年生も自己評価の平均値が上昇している。

6年生のアドバイスを受けマスターする力
5年生に技術を伝える力

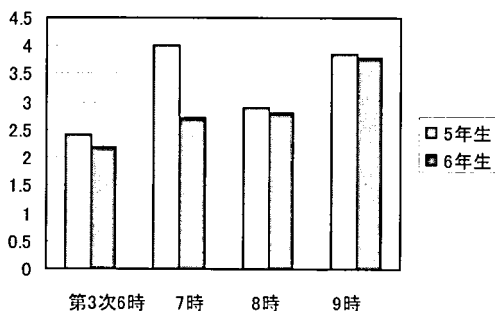


図5 音楽的なコミュニケーション力の能力面についての自己評価の変容

一方、資質面についても、図6から5年生も6年生

更に、第3次の9時は、ゲストティーチャーに富澤裕氏を迎え歌唱指導をしていただいた研究公開の時間であったが、全員が自己評価で肯定的な評価をしているように、音楽の学習内容に関わるコミュニケーションがしっかり取れた。これまで学習したことを生かしながら自分たちの力で合唱をつくり上げることもでき、その喜びと満足感を味わっていることが表8からも分かる。

表8 「この星に生まれて」の4回目
富澤先生を迎えて

第3次9時を終えて

自分の最高の声が出せた。

第3次9時を終えて

今日は、「この星に生まれて」を富澤先生と完成させて、今まで習ったことを復習して完璧にできた。楽しかった。いろいろなことも分かった。

第3次9時を終えて

今日は、全員が100%の力を出し切れた。

第3次9時を終えて

富澤先生に教えていただいて、歌に込められた気持ちがよく分かった。

④仮説の検証

「選択教科の授業の中で、合唱の技術力とそれを異学年の相手に伝えようとする資質の両面を育てていけば、音楽的なコミュニケーション力が育ち、自分たちで音楽文化を創造する力（協同的創造力）を育成することができたか」について

- 異学年・異年齢の合同授業は、題材の中に考えや思いをしっかりと交流する時間を保障することで、上級生に教える難しさを克服することができた。その際、音楽科では全員の思いを交流しながら楽譜に記入していく活動がコミュニケーションのひとつの手がかりとして有効であった。
- 子どもたちがこれまで必修教科で学習してきたことを生かすような場を体験させることによって、自分たちで合唱をつくり出したという実感を味わい、成果や活動に価値を見いだすことができた。
- 音楽科のコミュニケーションは、音楽の学習内容に関わるコミュニケーションである。歌唱に関しては、「歌が歌える」という姿である。しかし、意見を述べたり意見の違いを理解したりしながら、自分たちの考えをつくっていく活動も協同的創造学習では大事にしていきたいところである。協同的創造学習の交流の方法については、今後更に注目していきたい。

(2) 中学校の取り組み

1) はじめに

現9年生は、昨年度から継続してミュージカルについての学習を進めている。8年生時は、年間2つの題材を用意し、前期は「英語の歌に挑戦しよう!」、後期は「ミュージカルを知ろう!」を学習している。9年生になってから、多くの生徒が9年生になってからオリジナルミュージカルに挑戦したいという思いを持って受講している。それは、昨年度のオリジナルミュージカルの自主公演を鑑賞することで、モチベーションが高まった生徒が受講してきたのではないかと考えることができる。よって、その高いモチベーションを維持しながら、本年度の取り組みへとつなげていきたいと考えた。

2) 中学校音楽科の研究仮説

「オリジナルミュージカル創作、発表に挑戦させる」という題材設定をし、それをプロジェクト型方式で学習させることで、生徒たちは主体的かつ協同的にミュージカルをつくりあげる過程の中で、自分とは異なる考えに触発されながらお互いの表現力を伸ばし、高めることができるであろう。

3) 指導の実際

題材「オリジナルミュージカルに挑戦しよう!」
(全42時間)

①学習の流れ

- 第1次 テーマを決めよう!
- 第2次 脚本の読み合わせをしよう!
- 第3次 作曲に挑戦してみよう!
- 第4次 表現の追求をしよう!
- 第5次 ステージで発表しよう!-1- (文化祭)
- 第6次 ふり返りをしよう!
- 第7次 より豊かに表現の追求をしよう!
- 第8次 ステージで発表しよう!-2- (研究会)
- 第9次 ステージで発表しよう!-3- (選択授業発表会)
- 第10次 ふり返りをしよう!

②エクササイズ

- ・柔軟運動のためのエクササイズ
- ・言葉をはっきり伝えるためのエクササイズ (早口言葉など)
- ・「演技すること」は、「相手を意識することが大事である」ということについてメンタル面を意識したエクササイズ
- ・どう見せることが自分をより美しくするのか?などを目的にしたウォーキング
- ・簡単な曲に振りをつけながら歌い踊るというエクササイズ

生徒たちにとって演技をすることは、非常にはずかしいことであり、はずかしさを乗り越えなければならないことである。例えば、「鏡を見るのが恥ずかしい」という年頃ではあるが、それを乗り越えなければ演技ができないという思いで、思い切って別の自分になり、ミュージカルをつくり上げる仲間と同じ空間を共有するという立場で臨むことの必要性を指導している。それが、相手を信頼することにつながることであり、その延長線上には、集団としての高まりにつながることを考えている。

<生徒感想から>

- ・ダンスをしながら歌うのは、とてもむずかしいと思ったけど、やってみると簡単でした。みんなの前で演技するのははずかしいことだと思っていたけど、やってみたらとても楽しくて、はじめてしました。
- ・ステップの練習で難しいものがありました。次回は、できるように練習をしておきたいです。歌といっしょにおどりを入れてステップもすることは大変だけど、楽しかったです。基礎を身につけたいです。
- ・身体で感情を表現するということが意外と難しく、うまくできなかった。踊ったりジェスチャーしたり、歌ったりして楽しかった。習った基本的なことをフルに使っていきたい。
- ・朝起きてから学校に行くまでのパントマイムで、みんなそれぞれ違っていてももしろかったです。毎朝していることなのに、ものがないと表すのは難しいと思いました。歌と踊りをいっぺんにするのは大変だけどがんばりたいです。



③自分自身を知る

生徒たちには、次の視点で自分自身を深く見つけることを伝え、それを綴らせることで自己理解させるようにした。

- 自分を知ることができなければ、別の自分になることはできない。
- 自分をしっかり知ることによって、他人を理解することができるようにしよう。
- 役を演じるために、自分というものをふり返ってみよう。
- 自分をしっかりアピールすることができるようにしよう。

<生徒記述から>

性格は、自由気ままでマイペースな感じで楽天的だと思う。母いわく、私は変なところで気を遣う人らしい。また、多重人格とか言われたことがあるけれど、私はふつうだと思います。ピアノを5歳から始めて今も続けています。一応、一つのことをちゃんとやり遂げる性格だと思います。好きな音楽はほとんどです。アーティストもレミオロメン・・・とかほとんどイケます。趣味は、ピアノとサックスで自慢はどこでも寝ることができることです。

④テーマ設定

グループに分かれて、ミュージカルのテーマについて話し合った。すでに、脚本係が中心になって「オズの魔法使い」を土台として脚本製作に向けて着手はしていたもの、全員でミュージカルのテーマを確認することで、思いを共有できるようにした。

「愛と勇気」「希望」「プラス思考」

各グループの思いを交流することで大枠を固め、それをもとに脚本担当者が台本を練り上げていった。また、全員出演、登場人物が多い方がよい、踊りと歌を増やしたい、などの希望も取りあげ、脚本づくりを進めることができるように配慮させるようにした。

⑤音楽づくり

- リーダーを中心とした音楽づくり
- 既成曲を活用して

a. は、ミュージカルの中で演奏される曲について「新たな音楽を生み出す」という観点で音楽づくりを進めていった。各セッションを進めていくリーダーを決定し、音楽づくりはそのリーダーを中心に行った。歌詞も音楽担当グループが創作していった。音楽のイメージがあっても、記譜や伴奏について音楽づくりが難しい面もあることから、今年度は、「作曲」についての講師を招き、全員で「歌をつくる」ことについて学んだ。

その概要としては、○言葉のイントネーションに気をつけること、○言葉を発音してみてそれにメロディーをつけること、○簡単な言葉に旋律をつけること、である。この授業についての生徒感想を次に記す。

<生徒感想から>

・作曲するのに、言葉を話すときのイントネーションが基本になっていることを初めて知った。普段話していても、考えすぎてしまうとそのイントネーションが分からなくなってしまうようだった。それをもとにして曲をつくるのはものすごくむずかしくてつづけなかった。

- ・講師の先生から言葉のイントネーションについて教えてもらい、作曲の工夫点を学ぶことができました。ちょっとした違いで曲の感じが変わってくるので、また作ってみたいです。
- ・音楽にも、言葉の山が必要だということを初めて知ることができました。山を意識して曲を考えるのは難しいけれど、感情や意味が相手によく伝わるので、少しずつ慣れていきたいです。
- ・言葉のイントネーションを線で表すのは初の試みでとても楽しかったです。あと先生が作った曲はとてきれいですごいと思いました。

b は、すべての音楽を子どもたちがつくることも難しいので、既成曲も活用するようにしている。音楽を挿入する場面については、全体やリーダーが教師とともに脚本に沿って考え、どのようなイメージの曲を流せばよいかを決定していった。その際には、外部講師によるTTにも大いにかかわってもらうようにした。

⑥子どもたちの主体性とそのふり返しを生かす

生徒たちは、ミュージカル上演のために、「音楽」「脚本・照明」「美術（大道具・小道具）」「衣裳」という仕事分担も担ってミュージカルづくりに取り組んでいる。各セクションの仕事のカラーを生かしながらミュージカルにおけるキャラクターづくりやその役柄の表現をするということは、イメージをより豊かにふくらませながらの表出効果があると考えている。よって、ステージ上でのキャラクターの表現とその表現をより効果的に表現するための副次的な表現の相乗効果を考えさせながら学習を進めることのよさを生かして学習を進めていった。その学習過程のなかでは、各セクションでリーダーを置き、指導者とともに学習を進める役として主体的にかかわらせることで、自分たちでよりよい表現を追求したいという態度づくりを仕組んでいた。ただ、指導者側の思いと生徒の思いのすり合わせることやどれだけ生徒の思いを尊重すればよいか、という点においては場に応じての対応が必要だと考えている。また、「リーダー的な生徒の思いがすべてを決定するのか」という疑問もあるが、すべてがそうではなく、よりベストな表現を追求できるように話し合いを持ちながら進めることが、この題材のよさであると考えている。

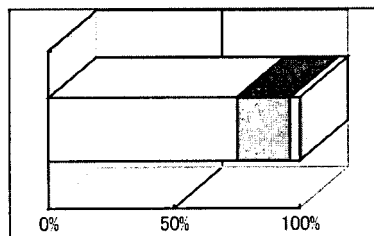
<生徒感想から>

- ・グループで考えたりするとき、協力してやれてなかった。踊りのときも、一定の人たちだけで考えたりして。もっとみんなが意見を出したらいいと思う。

- これからは、グループで協力していろんなことをやっていきたいです
- ・すぐく早いダンスを一通り通すことができてよかったです。できるかどうか心配だったけれど、見通しがたちました。細かいところも直して行って文化祭で自信をもってできるようになりたいです。
- ・今日は集中力がなかった。いろいろなことに笑ってばかりで、迷惑をかけたなと思う。まじめにがんばれた時もあったけど、次はもっとその場面を増やす。
- ・大本先生にきていただいて、いろいろ具体的な確認などができてよかった。まだまだ未完成だけど、形が見えてきたので、「見せる演技」というのを意識して取り組んでいきたいと思いました。
- ・やる気が出てきた。兵士についての動きをもっとよくするために、考えることができてよかった。身体が硬くて大変だった。兵士の動きが難しかった。

4) 仮説の検証

ミュージカル発表後の気持ち



- よってもよかった
- よかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

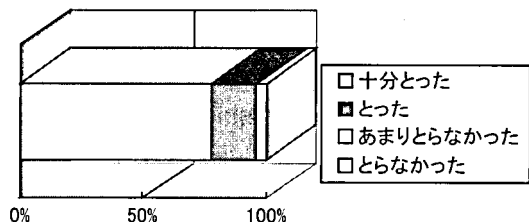
上記は、ミュージカル発表後の生徒の思いを表すグラフである。このグラフからわかるように、100%に近い生徒がやってよかったと感じている。その理由としては、ミュージカルを発表するまでの過程を含めた生徒たちの達成感によるものである。それらがわかる生徒の感想を見てみると次のとおりである。

(前略)でも、一人で全部やろうとしていたことに気づいて、みんなで協力してつくり上げていくということを学びました。ミュージカル上演中には失敗したこともあったけれど、とてもやりがいがあり、みんなでひとつのことをつくり上げることのすばらしさを学びました。

最初は、進度もよくなってできないのではないかと思っていたけれど、みんなで一生懸命やって発表までにぎりぎりできました。練習が進まなかったこともたくさんあって大変だったけれど、ひとつひとつのことをみんなで協力して終わらせることができて本当によかったです。(後略)

以上のように生徒同士で協力することの大切さを学ぶことで気持ちをひとつにしてミュージカルに挑戦する姿を見取ることができる。それは、この題材が仲間同士のコミュニケーションを必然的に喚起させるものであることに相違ないことに起因すると思われる実証的データがある。

仲間とコミュニケーションをとりながら進めたか



上記の表に示されるように、ほぼ100%の生徒が仲間とコミュニケーションをとりながら進めることができたことに満足感を得ている結果となっている。これは、音楽科で協同的創造力を培うためのひとつの力としてあげているコミュニケーション力が大きく働いたということが言えよう。そしてさらには生徒たち自身、「表現力」「音を感じ取る力」「イメージする力」「表現を感じ取る力」「音楽に合わせて身体表現を行う力」などの音楽的力が培われたと認識している。(生徒アンケートから) 例えば、「場面をイメージし、顔の表情や声の強弱を考慮することができるようになった」、「演技をしている人の声だけで、どのような立場で演技をしているのかを感じとることができるようになった」、「観ているものを意識して歌う、演じることができるようになった」、「怖い感じ、楽しい感じなど雰囲気に合わせて演技、表現することができるようになった」などの生徒たちの感覚は、演じることを通して音楽的感性を研ぎ澄ませ、表現力を豊かにすることにつながることができたと言えよう。

5) 成果と課題

・音楽づくりにおいて、すべての生徒に学習させることでより発展したものが創造されるのではないかという思いで、全員で音楽づくりについてのレクチャーの時間を取り入れた。しかし、それが単発であったり、発展させる時間を確保することができにくかったり、実質的には音楽的に経験豊かな生徒を中心に音楽づくりを進める形になっている。本来の意図は、多くの生徒たちに作曲を経験させるということであったものの、それは個人差がありなかなか難しいという結果である。しかし、作曲する力を

つけさせるということが中心というわけではないし、音楽を創造することの枠を大きく構えることで、多くの生徒が体験できるようにしたいと考えている。

- ・ミュージカル上演のために、各セクションに分かれ、リーダーを中心に仕事を進めるようにしているのですが、作業は能率的に進めることができています。しかしその反面、全体としての統一感に欠ける面もあり、他のセクションと合わせたときのバランスに課題が残るというデメリットがあるように思えるので、リーダー会を定期的で開催するなど全体としてのバランスがとれるような進め方を考える必要があると思われる。
- ・今年度は、全体での合わせの時間が極めて少なく、通し練習が難しい状況であった。パーツでの練習に追われる状況で、ミュージカルの総合的な質を高める時間がなかったように思われる。特に、各キャラクターの性格描写における表現手段の深化に課題が残るため、自己表現力向上においてふり返りや指導があいまいになってしまっている。
- ・子どもたちの中から選出したリーダー中心にミュージカルづくりを行うことで、自分たちで進めていくという意識を高めることができたり、意欲的に練習にのぞむことができたりしている。ただし、すべてをまかせるのではなく、音楽づくりなどにおいては、教師の支援が必要などところもあるので、リーダー的存在になっている生徒と連携をとって進める必要がある。
- ・この題材は、既習を生かして新たな文化を創造するという観点から「協同的創造力」育成に功を奏していると思われる。子どもたちの最終的なふり返りをもとにして、さらに細かな分析をしてその成果を確認したい。
- ・「協同的創造力」を支える5つの力が、すべての子どもに均等に育成されているとは限らない。ミュージカルづくりにおける各分野に所属して、リーダーを中心に活動するため、つけたい力において偏りが生じる場合があるかもしれない。ただし、ステージにおける自己表現は、自分におけるベストな状態を表現したいという思いで活動しているので、音楽を媒介にして表現力を培うという点においてはねらいを達成していると思われる。

- ・表現を深めていくためには、授業内ですべての活動を消化していることが難しく、課外を使つての活動を行うこともある。表現内容が大がかりなだけに、各々を追求していくための時間を要することがデメリットである。



9. 成果と課題

- 学園の教育力を生かした異学年・異年齢の合同授業については、小学校5・6年生の選択教科で継続研究ができた。中でも、音楽科は、協同的創造力を支える音楽的なコミュニケーション力に注目し、題材の評価規準作成まで研究が進んだ。来年度は、評価基準を作成して子どもたち

が学んだことの進歩の状況を明らかにするとともに、教師自身の指導過程や成果を評価し指導の改善に役立て、子どもたちの学習意欲の向上に生かしていきたい。

- 本年度は、音楽的コミュニケーション力に視点をあてて研究を推進した。小学校では異学年における合唱活動、中学校ではミュージカルに題材をおいて進めていった。これらの題材は、自分たちの表現をより豊かにするために有効であることが実証できた。子どもたちの思いを交流するタイミングや学習形態に工夫をしたことも有効であったように思われる。ただし、お互いの思いを交流し受け入れ、さらに豊かな表現を目指すためには、そのためのモチベーションを持続させたり、交流するための雰囲気や態度を醸成したりすることは欠かせないので、その視点においてはさらなる研究を進める必要があると思われる。

引用（参考）文献

- 1) 中等科音楽教育法；中等科音楽教育研究会（音楽之友社）2005，p37
- 2) 初等教育資料No.570；（明治図書）1991，11月号
- 3) 教育音楽・小学版；（音楽之友社）1997，10月号